

発達 10 (267~274)

座長 渡辺弘純・木下芳子

- 267 言語の行動調整機能の獲得水準と日常生活場面における行動
愛媛大学 渡辺弘純
- 268 就学前期に於ける言語の行動調整機能—内言による行為の定式化の発達—
福島市 北村純子
- 269 Referential communication における役割取得の影響
愛知県立大学 青木民雄
- 270 リファレンシャル・コミュニケーションにおける比較過程の検討
村上京子
- 271 社会的・非社会的条件における言語化の差異
埼玉大学 木下芳子
- 272 幼児のあいさつことばの習得に関する研究
福岡教育大学 光安文夫
- 273 Decoding Ability の発達—メッセージの意味理解について—
浜松・昭和幼稚園 坂田尚美
- 274 低学年学童の構文力
筑波大学 保坂真理

渡辺(267)に、鳥海(東学大)は、行動調整機能の獲得との関連で直立姿勢保持の持続時間を取り上げた理由を問い、内的命令の有無やその拘束力の強弱を反映すると考えられると答えた。

北村(268)について、木下から、内言により行為の定式化が行われる傍証になる他の反応はとらなかつたか、という質問がなされた。これに対して、北村は、必要性は認められる、とのべた。また、渡辺は、①この結果から、メカニズムとしては3才児で既に獲得されていて一般化がその後に行われると考えてよいか、②課題提示の時間間隔は統制されているか、と問い、北村は①について、「そのように考える。」②について、「統制していないが、統制の必要がある。」と回答した。

青木(269)に、坂田(浜松昭和幼稚園)より、小2では転換不必要の反応が他学年より多い。しかし転換しなかったものが、フラベルの図式の「必要」のレベルが既に出来ているとは限らない。そこを明らかにする転換必要課題を課す方がよいという意見が出された。村

上(大垣女短大)、木下より、反応の正転換・有効転換の分類基準の質問がなされ、自己基準において色反応が出ていなくて、他者へのメッセージで、形または大きさの次元を伝達しているが、色情報もつけ加えた反応は、正転換としないと回答した。

村上(270)に対し、木下より個々の語の連想の強さのみによらず、同じような連想価をもちながら、一方の語のみ100%の弁別力をもつ場合もあるがその点をどう考えるかという質問が出された。それに対し村上は、ここでは、弁別力のない語をrejectできるかどうかという点に焦点をあてている旨の回答をした。

木下(271)について渡辺より、手続についての質問があり、続いて村上より、内容分析の結果が、実際に、ことばで他者にコミュニケーションする場面を反映しているかどうか、5年ではむしろ、content自体が異なってくると予想されないか、という質問があった。これに対し、言語化させたものを書かせたので、5年では2年よりも、同じcontentについて、より詳しく言い換える反応が多かったという回答がなされた。

光安・横山(272)に、木下はあいさつ行為は、相手との関係で決ってくると思うが、他の場面における行動とどのように関連しているか、と問うた。光安から、この点が問題であり、現在検討中である旨の回答がなされた。渡辺からのH群L群の分類基準の問いに対しては、横山が得点の分布をみて分類したとのべた。

坂田(273)については、木下より、反応が収束していくことの心理学的意味についてどう考えるか、年少児ほど、メッセージの一部のみに反応するので、反応がばらつくのではないかという考えが出された。これに対し、そういうこともあるが、年齢が上になるほど、社会的経験なども積み重なり、一般的共通の意味を獲得していくためと考えるという回答があった。

保坂・後藤(274)に対しては、木下から、構文力についての環境の影響をのべるとしたら、もっと細かい言語環境データも必要だとの意見が出された。条件統制の問題にかかわって、横山・光安・渡辺からも同様の問題が指摘された。また、横山から、構文力をみるのに、口頭作文などによって検討してはとの意見も出されたが、須藤は、資料分析の困難さなど測定上の問題をあげ、出席者の関心をよんだが、時間上の制約もあり、討論を深めることができなかつた。

(渡辺弘純・木下芳子)